
東方執事物語

ダン・ボール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方執事物語

【Nコード】

N1458Z

【作者名】

ダン・ボール

【あらすじ】

この物語は古来よりスカレット家に仕える一人の執事が主人公の物語である。警告この物語には、ハーレム、オリ主、原作無視、キャラ崩壊、オリ主マルチチート、作者、文才チリ以下、更新バツラバラ、等が含まれております。あー、俺には無理、と思った方はバツクをお勧めいたします。まあ見てやる、といった心広い方は使用上の注意を読み用法を守って、気長に、正しくお読み下さい。・・・警告は・・・しました・・・よ？

執事プロフィール(前書き)

とりあえずは紹介です。

駄文ながらこれからよろしくです

執事プロフィール

名前

アレス・スカーレット

性別

男女両方

ランダムで変わる。1日経つと変わることもあれば、1週間以上経つても変わらないこともある。

年齢

紫よりは間違いなく上・・・

能力

男の時

あらゆる武器を扱う事ができる程度の能力

女の時

あらゆる能力を無効にする程度の能力

外見

男は髪、目、ともに美しい青色、男の娘

セミロングで後ろで纏めている

女は髪、目、ともに美しい真紅

ポニーテール

その他説明

性格はDSで冷静でノリが良い。

家事はなんでもござれ、知識も豊富。

一時期幻想卿から出ていた。理由はまたいつか・・・

恋愛にはそれなりに鋭いが、確信するまでが長い。
ようは気付いたのはいいが、もしかして違うかも・・・と考えたり
してかなり遠回りする。

執事プロフィール(後書き)

もう何も言つまい・・・

すいません、やっぱり一言・・・やりすぎた感が・・・

第一節 執事の日 前編（前書き）

一日が始まるみたいです。

クリスマス・・・さびシマス

第一節 執事の一日 前編

皆様、こんにちわ。

偉大なる主、レミリア・スカーレットの執事、アレス・スカーレットでございます。

え？スカーレットって名前あるのになぜ執事なんかしているのかだつて？

まあ、いずれお話ししよう、ええ、いずれ。

さて、そうこうしてる間にお嬢様が起きられたみたいですよ。

え、なんでわかったか？

・・・慣れ？

まあ、なんでもいいでしょう。おや？どうやら私も御呼びのご様子。一日の紹介も兼ねていきますか。

執事移動中・・・

「遅い！！」

いきなりですねお嬢様、慣れましたが・・・

「遅いと申されましても、私には咲夜みたいに時を止める能力はありませんし……」

「そんなもの関係ないわ！呼んだら1分以内に来なさい！」

「ですが、お嬢様、この館は肝心の主ですら迷うようなところ、それなのに私めが迷わずに来るのは厳しいかと……」

「なっ！？ま、迷ってないわ、さ、散歩しているだけよ！」

「ほう、最近の散歩は咲夜と泣き叫びながらするものなのですか、勉強になりました」

「えっ、いやっ、あれはっ、その……うっ、咲夜っ！」

相変わらず楽しいお方だ、ついでに泣き叫んでいたのは昨日のこと。そんなことを思っていると、咲夜が苦笑しながら、涙目のお嬢様を慰めている。

「相変わらずですね、アレス様」

「まあね」

楽しくてやめられません、お嬢様いじりは。

さて、今だ涙目のお嬢様は咲夜に任せて、フラン様を起こしに行きますか。

「咲夜、私はフラン様を起こしに行くから、お嬢様をよろしく」

「わかりました」

「うっ……」

そんな目をされても怖くありませんよ？

では、移動移動……

執事移動中……

さてさて、まいりました、地下室。

そういえばまだパチュリー様にお会いしてないですね

ああ、今日はおかけると言っていましたね。喘息がひどくならなければいいのですが……

まあ、とりあえずは気にしないでおきましょう。

まずはドアを開け確認を……

一つ目、部屋の雰囲気確認……よし、普通。

二つ……ん？その確認はなにか？昔起きた事件を機に私がするようになった事です。

あれはすごかったですね、なんせ妖精の死傷者数（消滅か？）が半端ないことになりましたから。

それにお嬢様や、咲夜、美鈴、パチュリー様、私とフルで出撃しま

したし。

さらにすごいことにその全員が大なり小なりと負傷しましたし。その中で運よく私がかすり傷で済みましたが・・・

あ、そういえば、この事件の理由、言ってますね。簡単に言いますと

お嬢様がフラン様を起こす　フラン様たたき起こされ超不機嫌　姉妹喧嘩　喧嘩による狂気解放　大乱闘

以上。

まあそんなこともあり、こういう確認するようになったのです。・・・とはいっても2つくらいですが。

二つ目・・・これは身体にダメージがあるからとても、非常に重要である。

それは「おはよー!!!」「ぬおおおおおおお!!!」

「おはよう、アレス!!!」

「は・はい・・・お・おはよう・・・ござい・・・ます」

これが理由である・・・ときどきフラン様はこんな風に抱きついてくるのです。

ただ、普通の人間ならそんなに痛くないし、多少よろける程度ですが、フラン様はあの吸血鬼・・・差は歴然である。

それにこの方は力加減がまだうまくできません。おかげでこのざまです。・・・私、妖怪でよかった。

それと二つ目の確認とは・・・もつわかりますよね？
周囲に隠れていないかの警戒です。

さて、確認も終り、腰の痛みも引いたし、腹の上に跨っているフライン様を降ろしますか。

・・・ああ、また美鈴に壁の修理頼まないと。

ついでにこれで5327回目ですね。

「フラン様、少しは加減してください、いずれこの腰が潰れてしまいます」

「ん~~~~・・・がんばってみるね!」

ついでにこのやり取りは5301回目。

「お願いしますよ・・・それはそうと、朝食ができていますよ」

「はーい!」

まあ、この可愛らしい顔を見れるなら安い・・・か？

第一節 執事の一日 前編（後書き）

もうちょっとマシにしたいですね・・・
スキー行きたいなあ・・・

執事の日 後編(前書き)

散歩行く ネット浮かぶ 気分最高 うまく書けない、表現できない

orz
ループ

まさに負の連鎖。しっかりしろよ、書けよ、やれよ俺・・・

執事の日 後編

皆様こんにちわ、初めてのの方は初めまして。

前回腰がいろんなことに使えなくなりそうになった、アレス・スカ
ーレットです。

では、さっそく、行ってみましょう。

執事移動中・・・

やってまいりました、紅魔館名物(だと思えます)ヴワル図書館。

え？お前食事はどうするんだって？私はあまり食べません、てい
うより食べなくても大丈夫なのです。

それにここは私の警備するところなので。

なぜ警備する必要がある「突撃ー！ー！ー！」・・・ほらね？さて、
今日もぶっ飛ばしますか。

「今日こそはアタイが倒してやる！」

この子は散るん、んんつと、チルノです・・・ん？今のはなに
かかって？まあ、見てればわかりますよ。

「また来たのですか、散るん、じゃなくてチルノ」

「ふふん、勝つまで何度でも来るわよ、だって、アタイ最強だもん
! ! ! ! !」

「……そんなに薄いものを強調しなくても……どことはいませ
ん、ええ。」

「チ、チルノちゃん、やめようよ〜」

この子は大妖精、または大ちゃん、苦勞人です。

「……相変わらず大変そうだね」

「い、いえそんな!こちらこそいつもすいません! ! ! !」

ああ、なんて真面目な子なのだろう、あとで、飴ちゃんをあげよう。

「さあ、羊、勝負よ! ! ! !」

「羊ではなくて執事ですよ」

だから?と言われるんですよ。

「そ、そんなのどうでもいいのよ!!--いくわよ!!--」

あ、そろそろ、時間が・・・面倒ですね。ここは漫画でよく使われる伝家の宝刀、バット!!--を使いましょう。

「申し訳ありません、散るの」

「なんか名前が違う気がするけど・・・何よ」

「時間が来てますのでお帰りいただきますね」

「え?」

さて、対散るの、じゃなくてチルノ用のスペルカード、いきますか。

「伝家・・・」

「え、ちよつ」おかえりください散るの!」「名前違っつっつっつっつうう!!--!!--!!--(キラっ(」

ふっ、今日もつまらぬ者を打ってしまった。これで打点は2401打点です。

「あ、チルノちゃんーん、待ってー！ー！ー！ー！ー！」

あ、飴ちゃん・・・まあいいでしょう、また来た時に渡せばいいでしょう。

「・・・次、いきますか」

本日の警備は今ので終了ですし。あっ、あとさっきのスペルにはもう一つ別のあるですよ。

まあ、あまり名前は変わりませんがね・・・その名も伝家「お帰りくださいお客様！」です。

あ、どうでもいいですね、そうですね、じゃあ行きましょうか。

執事移動中

次の場所は・・・自室です。

なぜ自室か？・・・それは、待機のためです。

まあ、要はしばらくやることはないのですよ。

本来ならさらにすべきこともあるのですが、お嬢様が

「あなたは本来執事ではなく当主なのだからそんなものしなくていいのよー！」

だそうです・・・。

まあ、確かに本来血が繋がっていたら、ですけど。そのことを申しますと

「そんなことは関係ないのよ!」

だそうです。それでも私が渋るとお嬢様が折れて

「わかったわ、やらしてあげる。でも!!あなたは本来私たちの兄であり、スカーレット家の当主、そのことは忘れないで!」

とのこと。

それから執事をやらせていただきました。が、咲夜が来てからは私のやることはかなり減りました。

まあ、それでも色々忙しかったですがね、咲夜のメイド修行で。初めのころはそれはもう、目も当てられないほどで……。

まあ、この話はまたいずれしましょう。

さて、やることも無いですし、少し眠りましょう、どごその門番みたく。

あ、最後に一つ、私、今日は男ですよ。

え、今さら?……ですね。

では、おやすみなさい……。

執事の日 後編(後書き)

だ・ぶ・ん、来ちまったよ、ちきしょうめ!

あゝ、もう今年も終わりが近づいてきたなあ、はやいなあ。

そしてやることが少ない執事・・・執事なの？

第二節 執事、宴会に行く 前編（前書き）

なんだろう、最近俺の自重神が叫んでいる気が……

第二節 執事、宴会に行く 前編

皆様、こんにちは。

仕事という仕事がないのになぜか執事をしている、アレス・スカーレットです。

・・・はっ！すいません、先程まで寝ていたものでしてちょっとぼーっとしてしまいました・・・。

さてさて、とりあえずどのくらい寝ていたのでしょうか、時計を見てみましょう・・・2時間ですか。

結構寝てましたね。

とりあえずやることも無いですしどうしまししょうか、二度寝しまし
ようか？

5分経過

10分経過

20分経過

・
・
・
・
30分後・・・

何も思い浮かばないですね、ええ、全く。

二度寝したくても目が覚めていますし、さてどうしm「お兄様ー
ー！！！！」・・・これで暇では無くなりましたね。あと、雇
てくれてありがとう。そしてごめん、美鈴。

とりあえず、フランさま、じゃなくてフランが私に用があるみたい
ですね。

え、なんで様呼ばわりじゃないかって？日付変わりましたし。

それにプライベートと仕事は別にしてあるからですよ。

というのも、実はレミリアが

「あと、やるからにはプライベートと仕事は分けなさい」

とのおっしゃったんですよ。それで分けました。まあ、普通ですよ
ね。

ついでに私は昼夜と違い仕事は毎日ではないんですよ。

今のところは、月、水、木が私の仕事の日です。勤務時間は日付が
変わるまで。

え、なぜ毎日じゃないのか？レミリアに聞いて下さい。あの子の我
儘でこうなったんですから。

それはそうと、フランは私に何の用なのでしょうが。

「どうしました？」

「お姉様がね、今日あの色々と貧相な巫女の所で宴会があるから来なさいって」

「そうなのですか」

宴会、ですか・・・

「あの、フラン？」

「なあに」

「その宴会、誰が来るんですか？」

「ええっと、魔理沙、貧乏巫女、隙間ばり、妖怪とあと・・・」

ああ、あの隙間が来るんですか・・・できればもう二度と会いたくないのですがねえ。

「・・・くらいだよ？」

「そうですか」

残念ですが辞退しますか。

「申し訳ないですが、じたいs」駄目よ、お兄様「・・・なぜです？レミリア」

いつの間にかレミリアが部屋にいた。

「連れてくるように隙間とその式、あと亡霊、拳句には花妖怪からもお願いされているから」

「・・・行かないとどうなります？」

「そうね、たぶん紅魔館が消えるんじゃない？あの物言いだと」

なんとという脅しだ。せつかく今までの隙間と式、亡霊姫に花妖怪にも会わずにいれたのに。

「・・・」

「ねえ、お兄様」

「ん、何ですか？」

「そろそろ話してよ」

「・・・またですか」

「ええ、またよ。昔、何があつたの？あの隙間達と・・・」

「・・・まだ、話せません」

「・・・そう」

そういうととても悲しそうな眼をするレミリアとフラン。

でも・・・そんな眼をされても・・・まだ、話したくありません。
申し訳ありません・・・。

私は心でそう謝罪をする。

「とりあえず、ここを守るために今回は参加しましょう」

「ええそうね・・・」

さて、宴会か・・・血を見ることにならなければいいですが・・・

第二節 執事、宴会に行く 前編（後書き）

んん、ちよいシリアス？かな
さあて、どうなるのやら・・・
ついでに紅霧異変は起きてない。
なのに魔理沙と霊夢と知り合い・・・謎だぜ、俺

執事、宴会に行く 中編(前書き)

2連発・・・しっかりしようか、俺。そのうち俺の自重神に怒られるぞ

執事、宴会に行く 中編

皆様、こんにちわ。

宴会のせいで気分最低なアレス・スカーレットです。

今私は地下倉庫でどのワインを持っていくか悩んでいます。

一応候補は挙がっているんですよ？

その候補とはこの4つです。

スカーレットワイン

デビルブラッド

ブラッディマンオイ

ワイン

・・・ええ、私も色々言いたいですよ、本当。まともな物は無いのかとか、普通は？とか。

でも無いんですよ。まともが。

だってほかのが

バーニング

とか

I c a n
f l y

とか……

なんです、バーニングって!?

あれですか、叫びながら飲むんですか!?

最後のなんて飛ぶんですか!?!ええ!?

みたいにまともなのがありません。

とりあえず仕方ありませんから、この『ワイン』にしましょう。

1番まともです。まあ名前が普通過ぎますが。

「決まりましたか?」

咲夜か。

「まあ。大体は」

「そうですね」

と微笑む咲夜。相変わらず綺麗な笑みですね。昔はあんなに殺気をまとった笑みだったのに。

「ふふ」

「どうかしましたか?」

「いえいえ、ただあれほど笑うのが苦手だった咲夜がこんなに綺麗に笑うようになったものだからから、つい」

「き、綺麗だなんて、そんな・・・」

照れてる咲夜もかわいいいなですね。さぞモテるでしょうね。

「そういえば、君に好きな人はいるのですか？」

「ふえ？・・・す、好きな人ですか!？」

何を慌てていうのでしょうか？ははくん、さてはいるんですね。

「いるんですね？」

「え、あ、えつと・・・はい・・・」

おやおや、顔が真っ赤ですね。

「どうなんです？その人とは」

「・・・」

さっきの慌てぶりから一転、しょんぼりしている咲夜。・・・まあ、
なんです、チャンスはまだありますよ。

「チャンスはまだありますからがんばってください」

「・・・ええ、がんばります」

そう言いながら、腕に抱きつく咲夜。・・・まさかな。あと、胸、当たってるよ。ついでにPADじゃなかったんだな・・・ま、まあとりあえずがんばれ咲夜！

その後、適当に選んだワインを持って咲夜と一緒にレミリアのもとに行く事にした。

なぜか、レミリアに睨まれたが・・・なぜだろう？

執事、宴会に行く 中編（後書き）

まあ、宴会に行くまでのちょっとした話ですね。
あと地味に咲夜フラグ立っている執事。気づいてやね。

執事、宴会に行く 後編(前書き)

クリスマス・・・さびシマス

カップル・・・殺シマス

というか、1年過ぎるのが早いなオイ

執事、宴会に行く 後編

皆様こんにちは。

今絶賛歩きながら八つ当たりを受けている、アレス・スカーレットです。

なぜなのでしょう、咲夜と一緒に居ただけなのにレミリアにもものすごく怒られています、ええ、ほんとに。ついでにフランにも。

理不尽です、意味不です、無茶苦茶です。

今も横から「なんで咲夜と・・・」とか「そもそも私が・・・」とか思いつきり言われているのですよ。

咲夜は咲夜で「リードですね」とか「これに関しては主従関係なんて・・・」とか所々レミリアやフランに茶々を入れるものだから、さらに大変なんですよ。

はあ・・・それでなくてもあのクソ隙間のみならず、あの亡霊、拳げ句には狐に花妖怪まで・・・。

「・・・はあ」

鬱ですね。

え？なんでそんなに奴らが苦手なのかって？

・・・その質問は間違ってますよ。正確には『苦手』ではなく『大嫌い』ですよ。さらに正確にいうと『憎い』です。

で、その理由は・・・私の大切な家族を奪ったからですよ。ええ、物理的に、命を。しかもご丁寧に私の目の前で、楽しそうに笑いながら。

幽香

そして我らがレミリアと咲夜、そして私。

まあ、小規模なのですかね、この幻想郷では。

ていうかパチュリー、ここに来ていたのですか。こあも。

あ、今さらながらどういう経緯で知り合ったお教えしておきましょう。

霊夢はたまたま買い出しに行っている時に会いました。

魔理沙は魔法の森で珍しい物を探している時に。

アリスも同じ。

後には必要ないですね。

・・・まあ、八雲や亡霊などの出会いはいずれ話しましょう。

「あら、来たの？」

「来ましたよ」

「遅いぜ」

「まあ、色々だね・・・」

「こんにちは、アレス」

「こんにちは、アリス」

「案外遅かったのね」

「まあ、レミリアがちょっとね・・・」

「大変ですね・・・」

「慣れましたよ」

次々と挨拶を済ませていると視線を感じました。
八雲たちです。

・・・仕方ない、挨拶しますか。あまり空気を重くはしたく無いですし。

「これはこれは、賢者様、ご機嫌いかがですかな？」

「・・・まあまあね」

「そうですねか、他は？」

「紫様と同じだ」

どうやら他の3人もそうらしい。

そうですねか。まあどうでもいいですが。

「そうですねか、では私はこれで」

「あ・・・」

と伸ばそうとして引っ込める八雲紫。

まあ、奴らに私を止めることなのできないでしょうがね。
私はそれを無視することにしました。

「ああ、それと一つ」

「・・・何？」

「貴様らを許す気などないからな。これは一応礼儀で挨拶しただけだ。昔のように楽しく喋りあえると思うなよ？」

「っ!・・・」

「じゃあな」

紫だけではなく他の3人の顔も悲しみに染まっているようです。
私はそれを無視して、こちらを見ていたレミリアのもとに向かいました。

「おわかりいただけました？」

「・・・ええ」

「そうですか」

レミリアも今のを見て理由は分からなくても、どういう関係かは分か
ったみたいです。

「でもなんで？あのあなたが敬語以外で喋るなんて・・・」

「別に元から敬語ではなかったですし、あいつらには、その必要も
ないですから」

「・・・」

「ではレミリア、私は手伝いなので」

私はレミリア達を置いて、手伝いに行くことにしました。

ついでにあのあとからはレミリアも私、八雲達も気分は上がらず、
宴会を終えました。

霊夢や魔理沙達はクソ程テンションが高かったにも関わらずに・・・

執事、宴会に行く 後編（後書き）

ついでに作者は八雲家も好きですよ、亡霊も花妖怪も。

さてさて・・・もうちつと文の書き方を変えてみようかな・・・
まだまだ改善せねば

第三節 執事、女体化する（前書き）

さて、今年もあと数時間。
早いもんですねえ・・・

第三節 執事、女体化する

午前8:30

「……………はっ！、あゝ皆様おはようございます。
今日が覚めたばかりのアレス・スカーレットです……………ふあ……………」
「…眠い。」

「なぜだかすごく眠いです。今も現在進行形で睡魔と闘っております。
とりあえず、ボケっと……………ん、今日は女の姿ですか。
なるほど、道理で眠いわけですよ。」

「姿が変わると体力の消耗が激しいのかもすごく疲れるみたいなんですよね。おかげでこの通り
無茶苦茶眠いです。」

「ふと思っただんですよ。私、今まで自分の姿が変わるところ、見たことないんですよ、とても不思議です。」

「まあどうでもいいですね。ああ、それとなぜ女になったことに気付いたかと言いますと……………胸が重かったからです。あ、今の言葉、お嬢様には内緒でお願いしますね。ずっと前にお嬢様がこの胸を見て
「私だって……………私だって……………」

「と1日中落ち込まれた時がありました大変だったんですよ。
いきなり泣きついて来られたり、グングニルが飛んできたり、噛みつかれたり……………」

「逆にフラン様は

「すごい、バインバインだ〜！」

とか

「やわらか〜い」

とか

「私も将来ボン、キュ、ドカーンなニスバディになるかなあ？」

とか。ついでにその時のドカーンでお嬢様がピチュツたのは今でも覚えています。

そして

「フラン様、あなたの母上様はナイスバディでしたから大丈夫ですよ」

と私が言い、フラン様がお喜びになったのも今でも覚えております。そういえば、母上様は今どこにいらっしゃるのでしょうか・・・父上が病気でお亡くなりになってこの館を出てから早400年、今だ連絡もありませんし、無事だと良いのですが。

まあ、そのことは今は置いておいて、目もいつの間にか覚めましたし、さっさと着替えましょう。

服装は咲夜のメイド服の白黒バージョンと言っておきましょう。

少女着替え中、覗くな危険（生命的な意味で）

第一感想

「相変わらず慣れないですね・・・」

スカートとかはいつ履いても慣れません、ていうか短いですね、下着とか見えますよ、これ。

よく咲夜はこんなものを毎日履いてますね・・・。

愚痴っても仕方ないですし、さっさと行きましょう。

少女移動・・・

「おはようございます、アレス様」

「おはようございます、咲夜」

大広間に着くと咲夜がすでに掃除を始めていました。相変わらずの速さです。

「なにかすることは？」

「そうですね・・・あ、北館のお掃除をお願いします」

「わかりました」

「まとも移動中・・・」

「まったく、相も変わらず迷惑なほど複雑ですね」

どうしてこんなにも複雑なのでしょう。もう少しシンプルでも何ら問題は無いでしょうに。まあ、今さらですし、掃除をしましょう。

掃除中・・・

ふう、とりあえずは終わりましたね。あとはゆっく「パリーン
!!!!」・・・予定変更ですね。

とりあえず、私は『新聞』を不法投棄した『レズ』天狗を睨みます。

「文、何度も言ってるでしょう、不法投棄は止めなさいと」

「あやや、不法投棄ではありませんよ、立派な新聞配達ですよ！それと、私はレズではありません、両方いけるだけです」

「配達の仕方を変えなさい。そして私のナレーションに突っ込まないでください。ついでに、現在進行形で胸揉まないでください、くすぐったです」

やはりレズか、そして変態ですか。というか毎度毎度胸揉まないでください。

とりあえず、いつの間にか後ろにいた変態レズ天狗に向かって肘鉄を食らわす。

「いだっ！！あいたたたた、相変わらず素直じゃないですねえ、隙間が言っていたツンデレってやつですか？」

・・・もはや手遅れなのでしょうか。昔はあんなにも真面目で恥ず

かしがり屋だったのに……。

「……手遅れなんでしょうね」

「何を言いますか、今でも私は清く、正しい、射命丸文、ですよ」

「駄目で、ゴシップ、射命丸文の間違いでしょう」

「いやいや、私は事実を書いているだけですよ？」

あれで、ですか……

「それよりも、配達は？」

「ここで最後ですよ？」

「なら帰りなさいな」

「嫌ですよ、私の可愛い可愛い将来の恋人、アレスを置いて帰るわけないでしょう」

「置いても何も、私はこの者なので」

「嫁入りしたら妖怪の山の者ですよ？」

「残念なことに今のところ妖怪の山の方で愛している方はいないので」

「またまた、照れちゃって」

・・・ダメです、救いようが無いです。

「・・・」

「・・・(にっこり)」

「・・・はあ、わかりましたわかりました。少し私の部屋でお待ちください、掃除が終わったら紅茶を持っていきますから」

「さすが私の将来の嫁、わかっていますねえ。では、お言葉に甘えて」

そういうと文は私の部屋に猛スピードで向かっていった。

「・・・掃除しよ」

掃除中・・・

少女移動中・・・

「終わりましたよ」

「おつかれさ、って、どうしたんですか、ものすごくお疲れの顔ですけど……」

咲夜がとても心配そうに顔を見てきます。

まあ、あんなことがあったのです、疲れても何らおかしくしないでしよう。

少女説明中……

「なるほど……」

「わかりましたか」

「ええ、あの天狗を殺れば良いんですね」

あれ？一文字おかしいような……

「ん？咲夜、顔が怖いですよ？」

もうそれは鬼すら逃げてしまいそうなほどに。

「ではまいりましょう、アレス様、うらやm、んん、不埒な輩を潰しに」

あれ、ちょっと聞き間違えた？

「ま、まあまあ、落ち着きましょう咲夜」

「何をおっしゃいますやら、私はいたって冷静ですよ、coolですよ、冷静沈着ですよ、昔からよく物静かで冷静な子ね、とよく言われていましたし」

咲夜、あなたが壊れてきています。

「さあさあ、行きましょう、いざ、まいりましょう」

「咲夜、落ち着きましょう、って、何この馬鹿力は!？」

少女、引きずられ中・・・哀れ

「天狗!!!念仏を唱える準備は良くて!？」

ああ、咲夜が扉を蹴り壊したせいでまた修理が必要に・・・

「あやややや！？いきなりなんですか！？」

「うるさい！？貴様のようならやm、っと、不埒な者は今すぐ葬らなければ！」

・・・おかしい、咲夜はもっと静かで真面目なはず。

「不埒とは失礼な！将来夫婦になるのですからこれくらいのスキンシップは普通です」

あれ、女同士で結婚できましたっけ？それより私の意志は？

「寝言は寝てから言いなさい！女同士の結婚なんて頭大丈夫？」

「あやや、この幻想郷に常識なんてありませんよ？」

おい、それはそれでどうなんですか？

「と、ともかく！アレス様はこの館に必要なとても大切なお方！あなたのような者にやるわけにはいかないわ！！」

・・・もう、何も言いません。

「ならば、力づくでも貰って行きますよ?」

「・・・やれるものならやってみなさい」

わーお、部屋の温度が低下してますよ。

それより、暴れるなら外でもらいましょう。

「二人とも暴れるなら外にしてください」

「わかりました。任せてください、私がこの天狗を駆除してみせます!」

「ほう、それは楽しみですねえ、ではアレスさん、愛のひとはまた今度で。では!」

そういうと二人は外に出た。

・・・平和の良さを改めてわかった、今日、このごろなのでした。ついでに3時間後、私がお昼のおやつを食べていると咲夜がボロボロになりながらもすつきりした顔で戻ってきました。

第三節 執事、女体化する（後書き）

来年は良い年になりますように・・・
感想などお待ちしております

では皆さん、良い年を！

第四節 執事、共犯者になる（前書き）

はい皆さん、あけましておめでとつございます！

今年こそはとがんばって起きていたのですが・・・寝てしまい初日の出を見れず。

来年こそは！

第四節 執事、共犯者になる

午後6時

皆様、こんばんわ。

現在、女性の執事、アレス・スカーレットです。

え？女ならメイドだろって？気にはいけません。メイドは馬鹿な妖精メイドと完璧なるメイドで十分です。

まあ、それは右か左に置いておいて、今現在お嬢様が大広間で何かのお話をなさっているみたいなんですよ。

「ね、暇だしこれくらいしても大丈夫だと思うの」

「でもレミイ？そんなことしたら博麗の巫女にボコボコにされるわよ？」

「大丈夫よ、巫女といえど私には勝てないわ！」

「しかしお嬢様？」

「何かしら中国」

「ちゅ、中国・・・う、噂ではあの隙間をもボコボコにしたとの噂もありますか？」

「え・・・で、でも噂でしょ！？そうよね、アレス！？」

「そうでしたっけ？確か去年の宴会で隙間がいらぬ事をして巫女がボロ雑巾にしたと言っていた覚え・・・」

「え、そ、そうなの？ど、どうしよ、ねえ、どうすればいいのお兄様！？」

ああ、パニックでカリスマがbreakでbrokenしてますよ。呼び方まで変わってしまってますね。それと今はお姉さまですよ？

「まあまあ、落ち着いてください」

「そういえば、アレス？」

「どうかしましたか？」

「咲夜は？」

「今自室で着替えを」

「そう」

久しぶりですよ、あんなにすっきりした咲夜を見たのは。

「で、でも、大丈夫よ、だって私だもの！」

それは理由になってませんよ？

「でも、お姉さま？」

「何かしらフラン」

「異変を起こすんだよね？」

「ええ、そうよ」

「てことはだれかが解決しようと動くわけだよね？」

「まあ、そうね」

「巫女以外にも来るんじゃないかなあ？」

「・・・そうね」

あ、顔から余裕が消えてきましたよ？

「もしかしたら隙間ババ、隙間も来たりするんじゃないの？」

「・・・」

「それを言うなら暇な妖怪とかも色々来ることになるわよ？」

「・・・」

「そうですねえ、まあ、夜雀とかは来ないでしょうけど隙間の親友などが来たら大変でしょうね」

「え、隙間に友達いたの？」

「……」

まあ、そう思いますよね？でも本当に残念なことにいるんですよあの隙間、憎たらしい！

「ええ、あの亡霊姫ですよ」

「……」

今日はよく静かになりますね。普段もこれくらい静かであれば、少しはカリスマもbreakしにくいのに。

「だ、大丈夫だ、も、問題無い」

「本当ですかねえ？」

「お兄様……」

・・・あれですかね、ほら、あの、F013のブレイク値でしたっけ？あれが低いのですかね？もはや回復はしないんでしょうかね？

「とりあえずですね、お嬢様、やるんですか、やらないんですか、どちらです？」

「え、あ、それは・・・」

「それは？」

「・・・やるわ！！！！」

おお、今一瞬だけたくましく見えました、本当に一瞬だけ。

「そうですね、では、決行する予定を決めましょう」

「え、今すぐよ？」

「・・・」

まだ何も計画も作戦も決めてないのにですか？

「な、何よ」

「いえ……」

ああ、なぜでしょう、あなたの母上と父上はともカリスマが溢れていてとても天才で冷静なお方だったのに……あ、あれですか、まだまだ若いからですよ、そうですね？……大丈夫ですよ？

「……では改めて、本日決行でよろしいんですね？」

「ええ!!」

……まあ、何とかなりますよね？

「ふふつ、今宵が楽しみだわ!!」

私はとても不安です、ハラハラです、ええ、本当に。何も変なことが無ければいいですけど……。
あ、咲夜に言いに行かないと……。

第四節 執事、共犯者になる（後書き）

やっと原作一個目始動ですよ

そして相変わらず文がグダグダ・・・

そして相変わらずの原作break!

あれ、紅魔郷の事件の理由ってなんだったかなあ・・・最近してないから忘れた

第五節 執事、振り返る（前書き）

はい、やってきました、問題のシリーズ！

うまく書けるのか・・・

ついでに原作では登場しない方やオリキャラが何人か出る予定です
今回は1人ですよ

第五節 執事、振り返る

午後11:50分

皆様こんばんわ。

現在暇で暇でうんざりなアレス・スカーレットでございます。

今私は玉座の間の扉の前に待機しているのですが・・・

「暇です!!!」

いや、本当に。先ほどまでは本を読んでいたのですが読み終わってしまつて・・・題名は

『友情はこうして取り戻すもの!! 著者 とある名無しの隙間』
です。

まあ、見たときはまさかあいつか!?!とか思いましたが、まあ読んでみたら、それなりに勉強になる事が書いてあったので特に気にしませんでした。

それにあいつがこんな事を書くとは思えませんし。

え?どんな事かつて?確か・・・

友達と喧嘩してしまつたら、自分から謝ること!

とか

話を聞いてもらえなくても何度もトライ!

とか・・・まあ、実際この知識が役立つかは今のところ不明ですが。え？あるだろって？

・・・あれは、むしろ謝りに来い！ですね。まあ来ても、帰れ、の一点張りですが。

まあ、ともかくですね

「暇」

ただそれだけ。ええ、本当。

あ、今日付が変わりましたね。時計台から鐘の音がしました。なら気晴らしを。

「レミニー」

「なあに、お姉様」

扉越しても聞こえるんですね、さすが私の妹！・・・まあ、扉はそんなに分厚くは無いですし吸血鬼ですしねえ、聞こえて当たり前です。すね。

「超暇なんですけどー」

「もう少ししたら暇じゃ無くなるわ」

「ええー、いつー？」

「……あと……15分くらい？」

よし、いじりまわして暇を潰しましょうー！まずは……あれにしましゅう！

と・い・う・こ・と・で

「ねえ、レミィ……」

まずはちょっとシリアスな雰囲気を出しながら言つのがコッなのです。

「……なに？」

お、掛かりましてね。あ、ついでに、今だにこれが冗談とわかったことはありません。毎回騙されているんですよ。

「私、この館を出ようと思っているのですよ……」

「……え？……ああ、あれね、昔よくやられたあの冗談ね」

ふ、レミィ、甘いですよ。

「違うの、今回は本気なの・・・」

「えっ？」

普段使う敬語が無くなったのに気付き、少し戸惑いが見られますね。

「う、嘘よね？だって、ついさっきまで普通に会話してたし・・・」

「それはみんなを悲しませなくなかったからよ・・・」

「え、でもでも！あなたはこの館の本来の当主！！まだお父様が言っていたこと、できてないでしょう！？」

これは、生前、今亡きお義父様が私に死ぬ間に遺した約束です。
今でも忘れませんよ、あの死ぬ間に寝室で交わした会話を・・・。

・
・
・
「私が亡くなった後、お前に次期当主を、任せたいのだ」

「な、何を弱気な事を仰るのですか！？」

「ふ、もう私は長くない、それはお前も、わかっているだろ？」

「お義父様？お義父様！！しっかりしてください！！お義父様・・・」

・
・
・
・
・

ああ、思いだすと涙が出てきてしまいますね・・・
さて、こんな気分ではできる事も出来ないですし、この遊びは終わりにしましょうー！！

「お姉様？」

「あ、レミィ・・・」

どうやら、部屋から出てきていたみたいです。

「どうしたの？」

「返事が来なかったから不安で・・・それより泣いてたの？」

「え？」

頬を触ると、濡れていました。どうやら、涙が出ていたみたいです。

「気にしないで、ね？」

「うん・・・」

すると突然レミィが抱きついてきました。

「レミィ？」

「出ていかないで・・・」

どうやらかなり不安にしてみましたようです。少しやりすぎましたね・・・

「大丈夫、あなたが成長しきるその日まで、私は離れないから・・・」

と、私も抱きしめ返します。ちょっとしゃがみますが。

「絶対だよ？」

「うん、約束する」

いたずらはできませんでしたが、特に問題はありませんね。
だって、こじやってまた、仲良くなれたんですから・・・

第五節 執事、振り返る（後書き）

うまくかけたか、シリアスよ。

とまあ、とりあえず・・・レミリア父登場！

さあさあ、母はいつ出るやら・・・

第六節 執事、一発KOにする(前書き)

最近モチベーションが高いのか結構な早さで書けている・・・と思います

とりあえず、このモチが続くまではそれなりの早さで書きたいです

第六節 執事、一発KOにする

午前0：15分

皆様こんばんわ。

またもや暇になってしまった、アレス・スカーレットでございます。先ほどはレミイをいじりまわそうとされていたのですが、諸事情により断念してしまい、暇になってしまいました。ええ、本当に。

「.....」

その結果がこれですよ。先ほども言いましたが暇です。何度でもここから先は長いので作者権限で切ります。

ちっ、作者め、後でボコボコにしてあげます。

まあ、とりあえずですね、何か起こってほしいわけですよ。

え？なんでそんなに自由なのかって？元はこんな性格なんですよ。

とりあえずですね、何か起きてほしいわけですよ。もう喧嘩でもな
んでも。

？

(現在赤い満月があるせいなので気分が高ぶっている模様)

「今日は一日何をされてもテンションが下がる気g(パリーーン！
！)」「愛に、じゃなくて会いに来ましたよ!!」・・・天狗ってど
う料理すればいいのでしょうか・・・」

窓をぶち割って侵入してきた文。さすがですね、もうテンションが下がりましたよ？

まったく、いつも誰がそれを直していると思っただけですか。我が家の門番・・・みりん？（せめて中国でお願いします！！）そうそう、中国ですよ！毎度毎度苦笑いしながらもやってくれてるんですよ？そういう優しい所を見習ってほしいですよ。

そろそろ割った本人にやらせてみましょうか。ええ、それが良いですね！よし、決定！あとでレミイにも言っておきましょう。

「で、何かご用でしょうか？」

「冷たいですねえ、折角未来の旦那か嫁になる人が来たというのに」

といかにも失礼です、みたいな言い方で言う未来の旦那か嫁（え？）候補らしい文ですけど、女性同士だと、旦那もクソも無い気がするんですよ。ええ、本当に。

そういえば、もし私に想い人が居たと聞いたらどう反応するんでしょうか？やってみましょう。

「残念ながら、私、もう心に決めた方がいるので」

さあ、どう出るでしょうか。

「では、その方の名前をどうぞ」

ん、何やら文から、薄く黒いオーラのようなものが・・・気のせいでしょうか？

「聞いてどうするんです？」

「もちろん、ボコボコにして、再起不能にして、生きることが苦痛になるようにしてあげますよ」

・・・オツツ、これは怖いですよ。

「そ、そんなことはしない方が良いと思いますが？」

「何を言っているんです？大切な方を外敵から守る、素晴らしいことじゃないですか！！！」

いやいや、そんな握り拳をして熱く言われましても・・・

「と、い・う・わ・け・で、さあさあ、誰なんですか？」

おお、怖い怖い・・・これは危険ですね。どうしましょう・・・

「さあさあ、さあさあさあ！！！」

「ええつと」

あまりの気迫に嘘でしたと言えなくなってきました。

Q 今、ある友人にもものすごい気迫で迫られています、どうすれば？

Q どうしてそうなったのですか？

Q かくかくじかじかで・・・

A ふむ・・・お疲れさまでした

ええ！？それだけ！！？

「誰なんです？」

「・・・」

・・・仕方ありません、後で面倒なことになるでしょうが背に腹は代えられません！

「文・・・」

「はい、なんです、そろそろ言っ気になりますう……」

「……」

「……」

「……やはり、頬では効きませんでしたか？」

「……」

「……(ボン!)」

あれ、顔がものすごく真っ赤になりましたが……大丈夫でしょうか？

「あゝ……文？」

「……(ドサッ)」

あ、倒れた……

「じゃなかった!!文!？」

倒れた文を抱きかかえる。

「私、もう死んでもいいです」

と鼻からあれを流れている文。というか、しっかりしてください！

「ちよっ、何言っているんですか!?!」

「ものすごく恥ずかしかったです……嬉しさが半端なく上回って……ああ、幸せ」

いやいやいや、何言ってるのこの人!?!というか、何その幸せそうな顔!

「と、とりあえず私の部屋で休んでください!」

「ああ、幸せ……」

あれから、自室に運び、文を寝かせた後、レミイが「何か血の香りがしたのでけれど、何かあったの?」と聞かれたので

「まあ、ちよっと事故があって鼻血が出て……」
と一部を隠して話しておきました。まあ、嘘は言っていません、嘘

第六節 執事、一発KOにする(後書き)

おお、これは・・・そろそろ自分の中の自重神やいろんな自重神に怒られそうですね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1458z/>

東方執事物語

2012年1月6日19時48分発行